

出 遇 い

安 田 理 深

『大無量寿經』の下巻に「東方偈」というのがあります。上巻の方には四十八願に先立って「嘆仏偈」があり、後の方には「重誓偈」というものがあり、四十八願を中央にして一つの組織を持っている。何れも重要な位置を持っていることは昔から言われている事であります。ところが下巻の方にもまた偈文があります。それは「東方偈」と言われていますが、「嘆仏偈」や「重誓偈」というような意味ではなく、この偈文の「東方諸仏国」という最初の字句をとってそう呼んでいる。別に内容について「東方偈」というのではない。内容からいうならば「往觀偈」ともいわれます。しかし注意してみると、この偈文を「往觀偈」と言えないことはないが、それであれば前半分の趣旨しか表わされていない。後半分の趣旨は表わされていない。だからして「往觀偈」というのは間違いではないが、偈文全体を代表してはいない。そこで止むを得ず名前がないから「東方偈」と言っている。そういう不思議な偈文です。これは本来から言うと、二つの分かれた偈文が一緒になっているのです。量から言っても「嘆仏偈」や「重誓偈」よりも長い。前半分は下巻の始めにつくべき性質のものであり、後半分は終りにつくべきものである。だから異訳の『如来会』の経典をみればそうなっています。

親鸞聖人はこの偈文を意味深く見ておられます。つまりこの偈文の前半分は十七願成就を表わすものである。十七願というのは、諸有の衆生に対して説かれる本願を流行させるもの、本願を行として成就する願である。本願とは何かと言えば十八願であるが、十八願は行ではなく願心です。その十八願を行として成就する願、念仏往生の願を流行

する願、というような意味が十七願にはあるわけです。そこところに重要な意味がある。宗教における教育という問題である。

教育ということが、宗教の実践ということになると非常に重要なことである。宗教の実践となると教団という問題を考えなくてはならないが、その場合教学ということが重要であり、教団における教学とは教育である。この教育ということが非常に大切である。これは非常に不思議な話ですが、信仰というものは一つ教育というものを超えている面がある。「廻心ということただ一度あるべし」という廻心の一回性は教育を超えている。けれども同時に我々にとって釈迦牟尼仏が何故に必要なのかと言うと、教育という意味で必要なのである。阿弥陀仏の他に「世尊我一心歸命尽十方 無碍光如来」と言われるように「如来」と「世尊」と二つ要る。つまり発遣と招喚である。特に発遣という意味は教師ということである。つまり教育者である。この教育者ということが、非常に重要なものでなくてはならないものになってくるのです。

教学というところも理論とか信仰とかと考えられがちですが、しかし教育という意味をもたなくてはならない。教学の実践とは教育である。そういうことが教団の唯一の使命なのである。信というものは教育を超えたものである。けれども同時に無上菩提の縁というものを求めるなら、善知識ということに尽きる。無上菩提の縁は無量無数であるが、しかし善知識ということでおさえるならば、それで尽くされる。無上菩提の因は信心であり、縁は善知識である。この善知識というのが教師である。従って教育者ということが、如何に重要な意味を持つものであるかが分かるところ。教育者というのは、一人で本を読むというのとは違う意味があります。「重誓名声聞十方」という偈文がありますが、この名声という意味です。『願生偈』には「梵声悟深遠」という名声功德としてあります。

皆さんの書かれた文章とか論文等に、時々聖典の言葉を引用するでしょう。ところが、下手するとその引用した聖典の文の方が勝っていて、本人の書いた文章が負けている。無駄があったり、過剰であったりする。しかし聖典の文

句は巍然としてそこに在る。あれがつまり声量というものでしょう。それはどうも出来ない力です。ああいう力が発遣というものです。別に聖典を解釈したり説明するのじゃない。もう声量が違うのである。

一心というものは廻心の体験であり、自覚ですけれども、自覚という言葉も広い意味があります。デカルトの言う *Bewußtsein* も一つの自覚です。即ち意識することということそれ自身も一つの自覚ですけれども、しかしそういう意味での自覚では、廻心という意味の自覚を表わすことは出来ない。成仏というような自覚を表わせない。

宗教的な意味の自覚を表わす場合には、ドイツ語で *erwecken* という言葉がありますが、つまり唯だ意識するということではなく、夢を醒ます。眠っているものを揺り動かす、という意味があります。それはつまり忘れていたものをおこさせるということです。忘れていたものをおこさせるのが念仏です。つまり念仏というのは人間を揺り動かさねばならない。それが教育です。非常に大事な仕事です。その揺り動かす時に声量が必要です。説明では揺り動かすことはできない。まあ一寸参考程度にとか、書いてある本をそこに積んでおくという程度のものでしょう。本ではないけない。人間の声にならねばならない。つまり本は何時でもある。しかし声というものは何時でもあるものではない。声には遇うものである。本に出遇うというのではなくて、声として初めて遇う。何時でもある本に、ただ一回的に出遇うのである。本はたくさんあるけれども、それによって揺り動かされて目を覚ますものはいない。

諸仏称名、諸仏の役目は称することであるが、この称名というのは何の為かというのと聞名の為です。諸仏称名の願というものは、聞名の為である。名というものは一面から見れば称であり、またもう一面から見れば聞である。称というものは讃嘆という意味もありますが、もっと「教巻」にまで突き詰めれば、説本願といわれるように説です。

「教巻」は本願を説くもの、そして本願を聞くものは「信巻」である。説と聞とが対応している。そしてその媒介となるものが名号でしょう。だから本願を聞くというのは、その名号において本願を聞くわけです。名号を通してそこ

に自分を聞く、つまり自分を見出すのである。聞といっても他人の話を聞くということではない。本願の始めに自分を見出す。この今の私から本願が始まったのであると聞かされる。ですから称名と聞名、或は本願を説くということによって我々は本願を聞くのである。これは教師というものによって聞くことが出来るのである。

このことは非常に大事なことである。これは教師が縁になる。縁になるのであって因ではない。因という面から見ると突発的であり、信心というのは「念仏申さんとおもひたつ」という発起である。ただ生起しているのではない。発起するのである。それはつまり湧出するというような意味である。信心は発起するものであって、煩惱がおこるよう
に起るものではない。つまり発起というのは秩序を破るという意味である。前後の秩序、段階的秩序を破るということである。そこに信というものがある。目覚めということがある。目覚めということの中に、段階を破るという事がある。その段階を破るということも教育方法でなさなければならない。しかし教育は段階的である。そうでないと教育が成り立たない。十地ということがあったり、三願転入ということがあるのは、信心というものが教育をもつということである。信仰は教育の歴史をもつということである。そこに段階性ということと、飛躍性ということが非常に密接に関係してくるところに、宗教教育、つまり教化ということの重要な意味がある。こういうことを離れては教団の意味はない。教育は教団の唯一無二の事業である。

ところで十七願というものを説くのは、「東方偈」では前半であるが、善知識によって我々が本願の名を聞いて信を得るということは容易でないということが「東方偈」の後半に述べられている。「若し人善本無くんば、此の経を聞くことを得ず」と書いてある。そして「曾更て世尊を見しもの、則ち能く此の事を信ず」というところに再会ということが出てくる。再び出会うということである。Widersehenということが出ている。今教えに遇った、即ち今教えに遇って信ずることが出来たということは、実はすでに教えに遇って信じて来た歴史の成就である。突発的に起

ったのではない。信仰は教育の歴史をもっている。信仰自身は教育された歴史をもっているのである。

そこで「東方偏」の偈文をつづけて見ると、「寿命甚だ得難し」と出ている。信を得るのも得難いが、さらに人間に生まれるということは容易なことではない。「人身受け難し、今已に受く」というわけです。生まれようと思って生まれて来た者はおらない。けれども信仰を得てみなければ「人身受け難し」というようなことも分らない。当り前だと思っている。人間の自由になるものだと思っている。生殖作用とは人間の自由になるものだと思っている。そういうことは技術という問題であると思っている。技術ということを言ってしまうと教育にはならない。教育はテクニクではない。考えてみれば生まれたということは、信を得てみなければ、生まれ難くもないし生まれ易くもない。何もない無自覚である。信を得てみて初めて生を得るということの重大性を知らされる。しかし信を得る為には、仏に遇う、善知識に遇うことが要る。善知識に遇うためには生まれるということが要る。だから、生まれるということが先というのは人生観である。人生観といっても、死ぬという自分の変革を通した人生観である。自分の変革を通さない人生観というのは、傍観主義である。信仰体験は個人の出来事であるけれども、主観的な出来事ではない。そこに大きな人生観というものが開けてくるという意味がある。

考えてみれば、今日生まれるということは、容易ではない。生まれても仏に遇うということは、つまり善き教師に遇うということは容易でない。信仰の教師というものは、どこまでも信仰の教師であって他の教師ではない。標準がないではないか。人格者といってもそれは別に信仰の教師ではない。善き師を見出すと言っても、その善い悪いと言うことを、どこで決めるのですか。信仰の教師というものは、信仰という標準で決めなければならない。信仰以外の標準で決めるわけにはいかな問題である。

信仰を得るのは私であるが、得しめるものは教師である。そういう善き教師に出遇うということは、生まれるということでしょう。ただ生まれるということと意味が違ってくる。実は信を得る為に生まれて来たのである。生まれた

から偶然に信を得た、というのではない。人生の意味が変ってきます。だから人身受け難し、人身を受けても仏に遇い難い。そしてまた仏の出られる世に遇うても法を聞くことは容易ではない。法を聞いても信を獲るということは更に難い。こういう具合にだんだん限定してくる。これは何を意味するのだろうか。

我々は生まれてから偶然のことで信仰ということに触れるのですが、それは友達とかの関係にあって触れるわけですが、しかしそういう場合はまぐれ当りでしょう。そこに大きな問題があります。そのまぐれ当りということ、そこに出遇いということがあります。

「出遇い」という表現は古くからありますが、近代の意味というものは、実存主義の概念と共に新しい意味を持って来た概念です。これは仏教に古くからある概念ですが、近來は流行語になっています。これが特に流行するほど使用範囲が拡大されたわけです。けれどもそれはただだけ拡大されても「出遇い」という概念が重要な意味を持つのは実存主義と共にある。それは何かというと、主観の脱却という意味です。つまり観念論からの脱出という意味が「出遇い」ということです。これは大事なことです。

世の中に生きているという事は、観念から脱出している。主観から脱出するからこの世の中に在る。そこには人もいるし、物も有る。ブーバーが言っているように、Ich und Duということもあるし、Ich und Esということもある。DuやEsのある世界です。人はパンなくして生きることが出来ないからEsがある。しかしパンのみに生きるものではないから、そこにDuがあるわけです。Esというものがある限りにおいて、経済関係を離れることは出来ない。経済なんかどうでもよい、と言うのはそれは凡夫ではない。けれども経済ばかりになってもいけない。Duがなければなりません。「汝」という問題です。

Esは客体であるが、Duは客体ではない。つまりそれは宿業ということです。どうにもならないことをDuやEs

で示すのです。パンなくしてはどうにも生きることが出来ない。しかしパンのみに生きるものは、それは自己ではない。パンに埋没してしまうものは自己ではない。しかし自己であるならば、パンはどうでもよいというわけにはいかない。そこには二重の矛盾を持っている。そこに主観を脱却しているのです。脱却させられるのです。

我々が世の中に生きるといふ事は、個人的主観というものに停滞することを許さないという現実がある。そこに Da Sein というものがあるのです。そういうところから「出遇い」というものが出て来たのです。Du は出遇うものである。しかしその出遇いというものには偶然というものがあってですね、偶然と必然というもの、ここでは広い意味の規定ですけれども、縁は偶然であるし因は必然である。因がなければ果が成り立たないけれども、しかし因をして果という状態に移すものは縁である。因が因自身の意志を持って果になるといふわけにはいかない。そういう極めて厳密な存在構造というものがあるのです。論理よりも、もっと厳しい構造である。

この世の中に生まれて、初めて何か偶然に信仰を獲るといふことがあるんでしょうか。そこでですね、再会という題を出したのは。そういうことはないんであって、もしそうならば本願に感動するといふことはあり得ない。犬も歩けば棒に当る、といった偶然ではない。実は偶然と置いていたけれども、考えてみれば、正しくその時起こるべくして起こったのである。起こってはならないものが、起こったのではない。

我々が信を獲るといふことは、外から見れば偶然のようであるけれども、実は時機到来なんです。時機純熟なんです。まぎしく得べき時なんです。もっと言えば、時間は量を言うのではないのですから、我々の一生でも二生でもいい。とにかく質的時間というものを表わすのに劫 kalpa というものを使う。曠劫已来の流転は今日の為であったのだと、こう言われることなのです。

だから如来の廻向というようなことも、具体的な意味は、時の廻向である。Sein は Zeit の廻向である。そういう意味であるから、我々は本願に遇うのは、実は本願に居ったからである。だから我々は生まれた後に本願に遇うの

ではない。生まれる以前に本願に居った。それだからこの世において本願に遇うて感動することが出来るのである。

全然得体の分からぬものに触れたのではない。全身全霊が本願の中に摂められていたのです。清沢先生の「万物一体の原理」とは、そういうことを言うのです。

そういう我々の構造は、*In der Welt Sein* ではなくて、*In der Tathagata Sein*、つまり如来内存在である。それが本来の構造である。

つまり言い方を換えるなら、世界内存在という構造を持っているものが凡夫である。その非本来的な構造を転じて、如来内存在というものに立つのである。それを回心という。それは無かったものに触れるのではなくして、本来有ったものに帰るのである。目覚めるといふのはそういうことです。

先程も言ったように、自覚と言っても世間の用例で自覚するというのと違っているのです。夢を見ていた者が醒める。そして醒めて見たら元の通りである。元に帰る。何も別に新しいところへ出かけるのではない。如来内存在という本来の構造に触れて来る。その為には実に長い教育の時間があるのである。

だからして親鸞は『平等覚経』から「東方偈」を引用している。これは「行巻」にも引用しているが、正依の經典を引用せず、異訳の經文を引用しているのは何故かと言うと、『平等覚経』には、正依の經典にないことが書いてあるからである。前に言った「南無阿弥陀仏」というのもないことですし、また阿闍世が来ているのです。

普通は阿闍世は『涅槃経』を俟つより仕方がないのであるが、古い『無量寿経』においては阿闍世が来ている。そこにこういうことを言っているのである。つまり阿闍世は、実は今始めて来たのではなくして、迦葉仏の時に我が弟子となったのである。今また来て我を供養するのである。だから、その次に「今皆復是に会して共に相値へるなり」と、つまり出遇いが示されてある。再会では再であるが、ここでは「今復」とあり復会です。一遍ではない復び会った。会って見たら、会ってあったのである。それは自覚不思議です。

本願というも諸仏に無量無数あるけれども、阿弥陀仏の本願は本国という感じを与える。本願が浄土を莊嚴しているのではなくして、本願そのものが本国である。阿弥陀仏の本願というものは、衆生の願と深い関係がある。衆生の願と如来の願とは密接な関係をもっている。つまり衆生と如来は位は違うけれども願で結びついている。願で約束されていた。誓約されているのである。だから本願に遇うということは、他人に会うということではない。我が本国にそこで遇ったのである。

こういう意味は、いろいろ宗教を比べてみて、これがよかったということではなくて、つまり理論でそういうことを証明するのではない。理論でやろうとすると、キリスト教や日蓮宗みたいなことになる。つまり、我が宗教こそはという姿勢になってしまう。そうではなくて、信仰を獲て本願に目覚めてみれば、信仰の内面がそれを証明してくれる。信仰を証明するものは、信仰の内にある。それを欲生というのである。欲生我国が信仰を証明するのである。外から理論で証明するのではない。遇うて見れば向うの方が先にこちらを見つけていたのである。向うも求めていたというより、向うが求めていたのである。

我々は全身全霊でもって本願を呼吸し、浴びて生きているのである。人間に生まれてから本願に遇うのではない。人生そのものが本願につかっている。それであればこそ我々が膝を打って「これだ」と言うことが出来るのである。本願の中に我々が居るからである。そういう意味で再会ということが言えるのです。

本願論の具体的な内容というのは、「東方偈」の前半は十七願の成就であります。後半は出遇いとか、再会とかいうことが書いてあり、その原理は何であるかと言えば二十願です。つまり二十願には「係念我国」とか「不果遂者」といって果遂せずんばやまんと、いやしくも本願というものに縁があるならば、縁といえは順逆共に縁であるが、本願というものに縁があつて遇うたなら、如何なる経験も本願に総合する。我々の曠劫已来流転して来た全体、即ち本

願に背いて来た歴史の全体が、本願に出遇う縁として総合してくる。それが不果遂者の願と言われる。約束されているのは二十願の力である。十七願と二十願というものが非常に深い関係をもつ。一方は称名であるし、他方は聞名である。普通は聞名を十八願というが、本願から見れば二十願のことである。この二つが十八願というものを展開させているのである。親鸞が真仮八願と言うけれども、最も独創的意義は、本願というもので、始めて明瞭に十七願と二十願の意義を明らかにしたことです。

十八願というものを、法の面において、つまり書かれていない本願を法の面より証明してくるのが十七願である。機の面において書いてないことを証明してくるのが二十願です。つまり現実的には十七願と二十願が一緒になっている偈文が「東方偈」である。そしてそこに南無阿弥陀仏のいわゆる教育、大行の教育の中に我々が約束されている。

『歎異抄』の始めにある、あれは十八願を書いてあるのですけれども、「誓願不思議にたすけられまひらせて往生をば遂ぐるなり」遂げるとはつまり果遂ということです。「信じて、念仏申さんと思ひたつ心の発るとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめ給ふなり」信じてまでは十八願であるし、「念仏申さんと思ひたつ」の申さん、これは十八願成就です。従って十八願成就の立場に立って、十八願ということを使わずに十八願を述べてある。つまり念仏往生の願ということです。念仏往生の願成就という立場から、念仏往生の願を書いてあるのが『歎異抄』第一章なのである。あそこに遂げるという字がある。つまり衆生の願を遂げしめるのが如来の願である。如来の願から衆生の願が出て来たのではない。衆生の願から如来の願が生まれて来たのである。私の為に如来の本願が出て来たのである。私の願の為に、そして私の願を成就する。遂げずんば止まんというのが二十願です。

我々が本願というものに、初めて遇うというものではない。我々が本願に遇うて感動するのは、すでに本願の中に居ったからである。そこへ呼び返されるのである。こういうような意味で、親鸞の本願論は重要な意味を持つのである。

(本稿は、昭和四十七年十二月十七日、相応学舎報恩講における講義の筆録の後半である。文責 林 一宏)